
 卷 頭 言 

日本ライトハウス理事長 岩 橋 明 子

〈国際協力の在り方に思う〉

5月18日から16日までアジア・太平洋眼科学会（APAO）が京都で開かれ、それに先立って昨秋国際失明防止機関（IAPB）の新会長に選出されたアラン・ジョーンズ氏が来日したりして失明防止やリハビリテーションの分野での国際協力について話し合い、また考えさせられる機会が多かった。ジョーンズ氏は英国連邦盲人援護協会（RCSB：SIGHT SAVER）の会長でもあり、アジア・アフリカで広く国際援助を行っているが、日本も国際活動に協力してほしいと関係者に依頼の話し合いをするために来たわけである。現在活動しているおもな団体は、CBM（西独）、HKI（米国）、RCSB（英国）、EYESIGHT（カナダ）、FORESIGHT（オーストラリア）、北欧諸国の盲人協会、フランス盲人協会などであるが、殆どのプロジェクトはこれらがいくつかつ共同で行っている。重複や競合を避けることや合同事業をすることでより大きい援助を提供できることなどがその理由である。RCSBやCBMはすでに長い経験を持っているので、それに基づいて当事国の状況を調査し政府の担当官と十分に話し合いを重ねて、ある程度の資金援助や将来的な協力の約束も取り付ける。そして単発的な援助ではなく、何年か後にはその国の力で自立して行けるような計画を立てる。そうしたいくつものプロジェクトに対し、あちこちの国際援助団体が協議して参加して行くのである。資金を出すところ、専門家を派遣するところ、当事国の人々の訓練を引き受けるところなどいろいろであるが、失明防止・教育・リハビリテーションなどに大きな成果を上げている。日本にも是非パートナーとなってほしいとの呼び掛けであった。

現在日本には大変多くのNGO（非政府団体）がありそれぞれ世界各地で多岐にわたる援助や協力をしているはずであるが、余りそれが知られていないとい

うか認められていないことも事実である。現にアジア・太平洋地域で失明防止事業をしているところもいくつかあるし、私もメンバーとなっているAOOA(アジア眼科医療協力会)も含めてネパールを中心に活動しているNGOも何団体か知られている。しかしそのいずれもが独自の方針で独自のプロジェクトを持っていて、相互協力は極めて稀である。それでは受入れ側はどうかといえば、要領よくあちこちの援助団体から協力を受けており、一对複数という形で交渉をしていることが多い。ジョーンズ氏はいろいろなメニューを提供するので是非その中から適当なものを選んで参加してほしいと訴えていたが、当日の日本側の対応は極めて消極的なものであった。

個々には政府外郭団体や民間から資金を集めているが、それを共同事業には使いたがらないし又そういう形では資金を引き出しにくいこともある。多国籍軍に参加できないので多額の資金を出しながら、結果としてあまり評価されなかった湾岸戦争のときのことが思い出された。参加しない理由はあのときとは違うけれども、何か国際社会の中での日本の立場としてどこか共通したのを見る思いがした。日本政府が行っている開発途上国への援助資金は膨大な額であるが、それは政府間のものであり、民生に繋がったきめ細かいことはやはりNGOでなければできないことがあり、また受益者の声やニーズがそのまま聞こえるのもNGOの立場の利点である。その段階で広く国際的に調整され、ノウハウが活用できればそれに勝ることはないということは理屈では分かっているのであるが、実際には「我々がー、我々のグループがー」という気持ちが前に出て閉鎖的になるのは日本人の国民性なのだろうか。

「国としては金持ちでも、民間団体は貧しいからー」というのがいつも援助を頼まれたときの断り文句であるが、年金生活者や教会員の僅かずつの献金を集めて今世界最大のNGOとして働いているCBMのことを考えるとき、その気になれば何かできるのではないか、自分たちの名前や榮譽に拘りすぎているのではないか、と後ろめたい気持ちにさせられたことであった。